

司式: 佃 雅之
奏楽: 中井喜久子

前奏: 「ローゼンメーデル」(R. ヴォーン・ウィリアムス)

招詞: あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。(使1:8)

讃美歌: 208「主なる神よ、夜は去りぬ」

交読詩編 147. 1-7

01 ハレルヤ。わたしたちの神をほめ歌うのはいかに喜ばしく/神への賛美はいかに美しく快いことか。

02 主はエルサレムを再建し/イスラエルの追いやられた人々を集めてくださる。

03 打ち砕かれた心の人々を癒し/その傷を包んでくださる。

04 主は星に数を定め/それぞれに呼び名をお与えになる。

05 わたしたちの主は大いなる方、御力は強く/英知の御業は数知れない。

06 主は貧しい人々を励まし/逆らう者を地に倒される。

07 感謝の献げ物をささげて主に歌え。竖琴に合わせてわたしたちの神にほめ歌をうたえ。

朗読聖書①イザヤ書 34. 14-15

14 荒野の獣はジャッカルに出会い/山羊の魔神はその友を呼び/夜の魔女は、そこに休息を求め/休む所を見つける。

15 ふくろうは、そこに巣を作って卵を産み/卵をかえして、雛を翼の陰に集める。そこに鳶も、雌も雄も共に集まる。

朗読聖書②ルカによる福音書 11. 24-28

◆汚れた霊が戻って来る

24 「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。それで、『出て来たわが家に戻ろう』と言う。

25 そして、戻ってみると、家は掃除をして、整えられていた。

26 そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。」

◆真の幸い

27 イエスがこれらのことを話しておられると、ある女が群衆の中から声高らかに言った。「なんと幸いなことでしょう、あなたが宿した胎、あなたが吸った乳房は。」

28 しかし、イエスは言われた。「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である。」

祈祷

天地の創造主にして活ける真の神、あなたの聖名を褒め称えます。この主の日の朝、あなたがすべてを整えてくださり、私たちが教会へと、ライブ配信へと招いてくださり、共に礼拝する時を与えてくださいましたことを心から感謝致します。

私たち一人ひとりが御子イエス・キリストによって結ばれた者として相応しく、思いを合わせ、声を合わせてあなたを賛美し、あなたのご栄光を顕すことができますように。あなたは、私たちに信仰を与え、聖霊の執り成しによって、主に仕えて生きる者としてくださいました。しかし、主よ、私たちは今、御前にあって自分自身を思うとき、本当に配慮なき愛の乏しい歩みであったことを恥じる者であります。私たちの中には、高ぶる心が生き続けています。自分自身が全く取るに足らない者であることを忘れ、自分の思い、自分の権利ばかりを主張し、人と争うことを止めることができずにいます。主よ、どうぞ、そのような私たちを御言葉によって悔い改

める者へと導いてください。あなたを愛し、隣人を愛し、私たちがいつも優しい言葉、配慮に満ちた言葉を語ることができますように、忍耐強く、情け深いあなたの愛によって、日々を歩む者とならせてください。

平和の主よ、地上にあなたの平和を来たせてください。この世界では争いが続いています。また新しい争いの兆しが至る所から聞こえてきます。主よ、どうか、あなたが導いてくださり、全ての者に互に赦し合い、互いに助け合い、互いに活かし合う道が開かれますように、あなたの平和の使者として、私たちを用いてください。私たちが十字架に磔にされた御子の姿を仰ぎ臨み、隣人と愛し合う者として生きることができるようにしてください。

主よ、再び感染症が増加しています。私たちが改めて基本的な感染対策を為し、愛の連帯性をもって命の礼拝を守り続けることができますように。また、至る所で災害が起こり人々の嘆きが聞こえます。主よ、どうか、あなたの憐れみがこの世界の隅々にまで行き渡りますように主の力が働いてください。苦難の中にあっても生きる力を与えてください。そのためにあなたの名による全ての教会がキリストの福音を大きなものとするのが出来ますように、あなたご自身が集う者一人ひとりに語りかけてくださり教会の使命を明らかにしてください。

慰め主よ、願いつつも集うことのできない兄弟姉妹のことを覚えて祈ります。どうか夫々の置かれた場所にあなたが尋ねてくださり、御言葉へと立ち返ることができるようにしてください。特に老いの寂しさの中にある友の上に、病の床にある友、痛みに耐えている友の上に、また、見守るご家族の上に、あなたの慰めと導きと力づけとが豊かにありますように、あなたの助けを求めます。

主よ、説教者を感謝致します。大谷昌恵牧師があなたに支えられ、聖霊の導きを豊かに受けて、あなたの御言葉の説き明かしが為されますように。聞く私たちも聖霊に導かれて心と思い開くことができますように。

今日、あなたから戴くその恵みを、私たちが言葉と行いをもって、この世で証しすることができますように。ここに集っております私たち一人ひとりにあなたが親しく臨んでくださいますようにと祈ります。

これらの祈りを主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌: 484「主われを愛す」3

説教 「生きるために」

大谷昌恵

前回、私がこの講壇から御言葉の取次ぎをさせて頂いたのは6月でした。前回は、本日の箇所の前 11 章 14 節から 23 節までの『ペルゼブル論争』という小見出しが付けられている部分から、皆さんと一緒に御言葉を聴きました。

“「主イエスは悪霊を追い出しておられましたが、そのことを「悪霊の頭ペルゼブルの力で追い出している」と「言う者」がいました。「しかし、イエスは、悪の頭ではなく、「神の指」、すなわち、唯一無二の神の力、聖霊の力によってのみ、「悪霊を追い出している」のです。それだからこそ、「神の国は私たちのところに来ている」のであり、私たちは信仰を固く守り生きて行くことができるのだ。そのことを神は喜び、主は御心のままに私たちを招いて導いてくださる。その時、必ず道は開かれる。”

ということをお話ししました。

さて、今日はその続き、11 章 24 節から 28 節までを用いてルカの語る主

イエスの物語を学んで参りましょう。今日の箇所は前回、イエスが群衆に向けて話をしておられた、その同じ状況で話を続けているものと思われます。つまりイエスの周りを人々が取り囲みイエスの話を聞いているのです。

まず 24 節でイエスは「汚れた霊は人から出て行くと」と語り始めています。前回の部分『ルカによる福音書』と小見出しを付けられた 14 節から 23 節までは、「悪霊(δαιμόνιον(δαιμόνιον))」という言葉が用いられています。『マタイ、マルコ、ヨハネによる福音書』でもそうなのですが、特に『ルカによる福音書』においては、「悪霊」の類について語る場面では、「汚れた霊」、あるいは「悪い霊」という表現よりも、「悪魔」を意味する言葉の方が多く用いられています。特に、ルカ福音書では、「汚れた」という言葉は「霊」に関してのみ用いられています。23 節までで用いられている「悪霊」も「悪魔」と訳すことができる言葉で、「汚れた霊」とは、多少ニュアンスが違ってきます。「霊」という意味のギリシャ語は「聖霊」をも表す「πνεῦμα(πνεῦμα)」ですので、「汚れた」<ἁκάθαρτος(ἁκάθαρτος)>という言葉と結びついて「ト・アカサルトン・ピニューマ(τὸ ἁκάθαρτον πνεῦμα) [冠詞 汚れた 霊]」使われていることに多少の違和感も覚えます。しかし、14 節からの話も、24 節以降の話も、どちらも神に敵対し、人に入り込むことによって害を及ぼし、入り込んだ人を苦しめる存在であること。そして、イエスによって追放される存在であることが共通しています。そういう意味では、この場にいる群衆たちは、イエスの話を、どちらも共通する「悪霊」の話題として違和感なく聴くことができたのだらうと思えます。

さて、本日の箇所である 24 節以降に関しては、「汚れた霊」は「人から出て行った後に、また元の場所であるその人のところに戻ってきていますので、追い出されたのではなく、自分から勝手に出て行ったのではないかと考えられます。もし、追い出されたのなら、「元の場所に戻る」という考えには、なかなかならないでしょうし、自分の意思で出て行ったからこそ、また、その場所に戻ることにしたのでしょう。

人から出て行った「汚れた霊」が何処行ったかと言えば、それは「沙漠」でした。新共同訳聖書で「沙漠」と訳されている言葉は、原文のギリシャ語では「乾いた場所(ἄνυδρο-τόπων(ἄνυδρο-τόπων) [水のない 所])」、つまり、「水のない場所」のことを表しています。

本日の旧約聖書イザヤ書 34 章 14 節から 15 節とさせて頂きましたが、ここは、まさに、この「沙漠」について書かれている部分です。14 節「荒野の獣(ἄγριος) [1船 2荒野の生物]」はジャッカルに会い、山羊の魔神はその友を呼び、夜の魔女は、そこに休息を求め、休むところを見つかる。」このルカ福音書でいう「沙漠」とは「荒野」とほぼ同じような場所を表していると思われますが、原語での意味を考えると、特に、「水がないこと」が強調されています。そして、「水がないこと」は、「荒野」以上に人が住むことは難しい場所です。

今年の夏の暑さは本当に厳しくて、「熱中症に警戒」ということが何度も呼びかけられていましたが、その際に必ず言われていたのは「水分補給」ということでした。食べる物が無いこと以上に、水が無い、水分が不足すること、人間にとっては致命的なこと。まさに、命に関わることであり、そこに住むことはできません。先にお読みしましたイザヤ書には、「荒野」、これは「荒野」であり「沙漠」とも言えますが、ここには「魔女」も棲んでいます。つまり、人から出て行った「汚れた霊」も棲むことができる場所と考えていいでしょう。しかし、イエスは「休む場所を探す、見つからない。」と語っています。人から出て行った「汚れた霊」は、そこに棲むのではなく、単に「休む場所」

を探すのです。しかし、休み処が「見つからない」。何故かと言えば、そこには「汚れた霊」が入り込んで「休む場所」とすべき人間がいないからです。水のないところには人は棲めない。生きて行くために人間には水が欠かせない。聖霊は溢れ出る水によって乾いた人々に安らぎを与えますが、生きて行くためには水が必要なのです。ですから水の無い所に人は存在せず、「汚れた霊」が入り込む場所、つまり人間が居ないのです。

「沙漠」に居場所を見つけられなかった「汚れた霊」は、「ではどうするか」と言えば、「出て来た我が家に戻ろう」、つまり元々自分が棲み着いていた人間の所に戻る、帰ることを決めます。この「戻る」(ἐπιστρέφω(ἐπιστρέφω) [帰る. 戻る]) という言葉には特別な意味はありませんが、ただルカ福音書の場合には、どちらかといえば、好い意味で用いられ、その主語も、イエスやイエスに友好的な人物であることが多く、「悪霊」や「汚れた霊」について用いられているのは、この箇所だけです。なんとも皮肉なように感じますが、この場面での語り手はルカ福音書の著者ではなく、イエスであることを考えると納得がいくような気もします。

さて、「汚れた霊」が元の場所へ「戻ってみると、家は掃除をして、整えられていた」とあります。「掃除をする」という動詞(καθαίρω(καθαίρω))は、単に「掃き掃除をする」等の意味ですが、「整える」という動詞(κοσμέω(κοσμέω))は「掃除をする」というよりも、「きらびやかに飾られている」ことを意味しています。ルカ福音書では 21 章 5 節で「神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話している」とあり、このときの「飾られている」は「整えられている」と同じ動詞が使われています。「汚れた霊」が居なければ、その場所は綺麗に整えることができます。「汚れた霊」が見出したのは、明らかに「前よりも良くなった家である」とイエスは語ります。かつて「汚れた霊」が棲み着いていた人は、「霊」が出て行き、清掃と飾りということによって、明らかに内面的にも外面的にも霊的に満足した状態になっていたのです。

では、「汚れた霊」は、その状況を見てどうするのでしょうか。あきらめて何処か他の所へ行くのかと思うのですが、そうではありません。「出かけて行って、自分よりも悪いほかの七つの霊を連れて来て、中に入り込んで、住み着きます。原文では、ここで、「自分よりも悪い」という比較級(πλεονεξία(πλεονεξία) 比較中接 劣ネ-0テラ(πλεονεξότερα))と、「霊」(πνεῦμα(πνεῦμα))という言葉を用いて、「自分よりも悪い」という意味を印象づけています。「七つの霊」とありますが、「七」はご存知のように聖書では「完全数」の一つです。ここでは、あまりその完全数が意味するものは無いと思われませんが、ただ、「自分よりも悪い」という比較級を用いていますので、「悪霊」、「汚れた霊」の強さが大きくなっていると考えられます。具体的なことは分かりませんが、「前よりも悪くなっている」という印象を受けることは間違いありません。ここで確かなのは、たとえ「汚れた霊」が出て行ったとしても、その「霊」が戻って来るのであれば、何の役にも立たない。むしろ、以前よりも悪い状態になるということです。人は「汚れた霊」に出て行ってもらったとしても、「聖なる霊」に棲んでもらわなければ、一層、悪い状態になってしまいます。「汚れた霊」も「聖なる霊」も居ない空き家の状態は「汚れた霊」が居るときよりも、ひどい状況になる」とイエスが警告しています。イエスの言葉の最後の部分、「そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる」ということが、それを示しています。

ではどうしたらいいのでしょうか。それは、本日の箇所の直前、前回の箇所の 23 節に書いてあることです。「わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている。」つまり、イエスに味方すること、イエ

スの側につくことによって、聖霊の棲む家になることを目指す必要があるのです。力によって力を排除するのではなく、イエスを通して神の国を受け入れることによって、「悪霊を追い出し」、二度と自分の中に戻らせないということ。それは単にキリスト教や信仰の力のみを受け入れることを求めているように見えますが、そうではありません。徹底して自分の中にある力を頼りとする部分を解除して行くということです。人間が自ら作り上げ考え出した何かを頼りとするのではなく、イエスは人間が求め作り出す能力を中心に置くのではなく、イエスを中心に置く行き方こそが大切であると語っています。

さて、27 節からは『真の幸い』という小見出しがつけられています。イエスの話を聞いた一人の女が、「なんと幸いなことでしょう」と、ざわめいている群衆の中からひととき大きな、高らかな声を上げるのです。「あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は。」という言葉がイエスに向けて語って言っているということは、ここで褒め称えられているのはイエスの母であるアリアです。ルカは1章で『マリアへの受胎告知』と『マリアの讃歌』の間にある、マリアがエリザベトを訪ねたときのエリザベトの言葉の中で“マリアへの賛美”を言い表しています。この二つの箇所特別な関係性は無いと見られますが、マリアが称賛されているということでは共通性が感じられます。“イエスが母の胎に宿り、母の乳房を吸った”ということのゆえに、他の女性から、“この母親が『幸いである』』と言われるのは東洋的な考え方によるものだ”と或る注解者は言っています。また、「胎」、「乳」といった体の一部分を表す言葉を用いて『母親』という全体を表現する方法は『ユダヤ的な表現方法』だとされています。つまりこの部分は、単にイエスの母マリアが賞賛されているのではなく、そのことによって、イエスご自身が賛美されていることを示しています。

27 節で、「イエスがこれらのことを話しておられると」、とありますが、では、「これらのこと」とは何を指し示しているのでしょうか。14 節から 23 節までをひとまとめにして考えると、『ペルゼブル論争』という小見出しの付いている部分で中心になっているのは 20 節「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ」という部分で、主イエスの勝利宣言がなされていることが挙げられます。また 24 節以降で言えば、“もし、気を許すならば一度撃退した対抗勢力が、再び頭をもたげ、一度出ていたにもかかわらず、再び勢力を増して戻ってきて反抗し、敗北の危機に陥ってしまう危険性”が示されています。その敗北の危機に立ち向かうにはどうしたらいいのか。それこそが主イエスの語りたいことであり、「むしろ幸いなのは、神の言葉を聞き、それを守る人である。」ということになるのです。

イエスはご自身の業において大切なのは、自分自身の偉大さではなく、“神の国がすべての反抗する支配や権力を圧倒して到来することである”と考えています。そしてそれ故に、“神を崇める人は、神がご自身の意志をお知らせになる御言葉を何者も奪い得ない程に固く守る人であり、そのような人をこそ、幸いである”と語っているのです。

『ペルゼブル論争』においては、主イエスが「悪霊」を追い出すことができたのは悪霊の頭であるペルゼブルの力によるものではなく、「神の霊」、すなわち、『聖霊』によって勝利されたからです。そして私たちは主イエスが“神の指で悪霊を追い出して下さったことの恵み”を信じることによって、神の幸に生きることができるのです。そして御言葉を聴いて行うことは、何か行動を起こすということより、“信仰によって神の恵みを受け入れることを行う”ことに繋がっています。

神の言葉を聞き、それを守る人は神の国、すなわち“神の恵みのご支配をもたらして下さった主イエスを心から受け入れ、主イエスがこの幸いの中に私たちを守って下さっている中に身を置く者のことだ”と言えるでしょう。自分の持ち物だけに固執し、それを守ろうとする強い人は打ち破られ、その自分の持ち物を奪い取られるかもしれません。しかし、神の御言葉に従う忠実な僕たちは祝福され、その神の言葉を守り聞き従って行くことができるのです。

人が生きて行くために水は欠かせません。『聖霊』によって溢れ出るほどに与えられる水は何よりも生きる糧となります。同様に、『神の御言葉』も、何よりも大切なものであり、これ無しには人は生きて行くことはできないのです。聖霊によって神の言葉を受け、イエスの語る『幸いな者』として、その御言葉を守り、携えて、ここからの一週間の日々も、歩んでいきたいと願います。

共に祈りましょう。

神さま、私たちには神さまから与えられる御言葉によって養われ、この世の旅路を歩んでいくことができます。どうかこれから後も、私たちがこの世で生きるために、あなたが何時も御言葉を私たちに与え、聖霊によって溢れ出る水を注いでくださいますように。この祈り、救い主イエス・キリストの聖名を通して御前にお届けを致します。アーメン。

讃美歌:462「はてしも知れぬ」

献金・感謝(三木優)・主の祈り(讃美歌 21 93-5A)

父なる神さま、主にある兄弟姉妹と共に礼拝を献げることが赦されましたことを感謝致します。敬愛なる大谷牧師の説教を通して豊かに御言葉を与えてくださり感謝致します。私たちがこの一週間を夫々の旅路の中で御言葉を糧として歩むことができますようにお導き下さい。

私たちは必要な物を与えられ、主の僕として生きることが赦されていることを感謝致します。今、夫々が与えられた物の中から、感謝と献身の徴を御前に献げます。どうぞ、祝して、教会の御用のために用いて下さい。

主が教えてくださった『主の祈り』を共に祈り、新しい日々を迎えさせてください。「主の祈り」…アーメン。

派遣・讃美歌 88「心に愛を」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、私たちと共に、いつまでもありますように。アーメン。

報告:案内(1)次週大掃除、(2)修養会申込、(3)たんぽぽ文庫古書頒布

後奏:「全ては神の祝福のうちにあり」(M. レーガー)